

聴覚障害部門と知的障害部門を併置する 特別支援学校（聴覚障害）における学校行事の実態調査

中越 健太

I 問題

現在、複数の各教育部門を設置する特別支援学校が出てきている。その組み合わせは様々であるが、2011年には、複数の障害種を対象とする特別支援学校が全部で、10種類あることが報告されている（文部科学省、2011）。その10種類の中、聴覚障害を他の障害種別と併置する組み合わせは、3種類ある。そのうち、元々聾学校だったものが、のちにほかの障害が併置された学校は、聴覚障害・知的障害と視覚障害・聴覚障害・知的障害・肢体不自由・病弱の2種類である。

財団法人全日本ろうあ連盟(2010)は、障害児個々のニーズの対応が必要であり、聴覚に障害のある児童・生徒は視覚による情報保障と手話言語が求められる。また、児童・生徒同士の集団的な教育環境の保障も考慮すべきである。そこで他の障害を持つ児童・生徒は聴覚機能が使えるので使われている言語の手段が異なる幼児児童生徒と一緒に学ぶ環境では、教育効果が期待できないと述べている。その一方で、聴覚障害児と知的障害児が交流する場面におけるメリットや問題点には何があるのかを考えていく必要がある。そこで、聴覚障害部門と知的障害部門が合同で行っている教育課程の一つとしての特別活動を取り上げ、学校行事を合同で行った時のメリットや問題点を明らかにすることには意義があると考ええる。

II 目的

本研究では聴覚障害部門と知的障害部門を併置する特別支援学校（聴覚障害）の運動会及び文化祭（学習発表会を含む）の実態について明らかにし、聴覚障害児と知的障害児が合同で行っている学校行事におけるメリットや問題点について検討する。

III 方法

1 対象

聴覚障害部門と知的障害部門を併置する特別支援学校8校のうち、元々聾学校だったのが知的障害部門を併置された7校に質問紙による回答を依頼した。回答者は、聴覚障害部門の主幹教諭または学校行事に詳しい教師とした。

2 実施期間

2012年8月から9月に行った。

3 調査項目

調査項目は、聴覚障害部門と知的障害部門を併置する特別支援学校（聴覚障害）のフェイスシート（2項目）、運動会（体育祭）についての項目（12項目）、文化祭（学習発表会）についての項目（10項目）とした。

IV 結果と考察

1 回収数

質問紙を送付した聴覚障害部門と知的障害部門を併置する特別支援学校（聴覚障害）7校のうち、回答のあった学校数は5校であった。

2 児童・生徒の人数

回答のあった5校のうち3校は高等部のみ聴覚障害部門と知的障害部門を併置していた。それぞれ聴覚障害部門は5人～7人であり、知的障害部門は10人～40人であった。残り2校は、小学部から中学部、高等部まで聴覚障害部門と知的障害部門を設置していた。それぞれ聴覚障害部門は11人～17人で、知的障害部門は42人～227人であった。そのことから、併置している学部の子どもの児童生徒数では、知的障害部門の児童・生徒のほうが多いことが分かる（表1）。

3 運動会（体育祭）

運動会（体育祭）で合同で行われている競技について、聴覚障害部門と知的障害部門の児童・生徒が交流できる、障害を理解したうえでお互い認め合い支えあう気持ちを育てることができることから団体競技が多く取り上げられていることが示

表1 併置している学部の子童・生徒の在籍数

	A校			B校			C校			D校			E校			合計
	小	中	高	小	中	高	小	中	高	小	中	高	小	中	高	
聴覚	—	—	5	—	—	6	—	—	7	8	9	0	4	3	4	46
知的	—	—	40	—	—	24	—	—	10	15	11	16	31	24	127	299

表2 合同で行われている競技

	競技名
団体競技	・大玉送り (A)
	・ソーラン (A)
	・綱引き (B)
	・ボール送りレース (B)
	・フォークダンス (C)
	・タイヤ取り (C)
	・加技競技 (C)
	・玉入れ (A・B・D)
個別競技	・紅白リレー (B・C・D)
	・短距離走 (100m走、200m走) (C)
その他	・開会式 (A)
	・閉会式 (A)
	・エール交換 (A)
	・応援合戦 (C)
	・準備体操 (D)
	・整理体操 (D)

された (表2)。

部門別に行われている競技については、各部門・学部で教育している体育科を中心とした日常の成果を発表するためや知的障害部門の子童・生徒には、ルールの把握や対人関係、当日の状態による順位が変わったり、大差がつかないようにするためなどに配慮した競技になっている。(表3)。

運動会 (体育祭) におけるメリットについて、子童・生徒に関しては、「日頃の学校生活ではあまり交流がないが、運動会 (体育祭) を通して、お互いに協力して交流することができることが挙げられた」など交流や協力する場面が多く挙げられた。教師に関しては「指導のスキルや経験値を高

表3 部門別に行われている競技

	競技名
団体競技	・赤白対抗リレー (学部・部門種目) (A)
	・演技 (知小・知中) (D)
	・赤白対抗競技 (聴小・聴中・聴高) (D)
個別競技	・徒競争 (A)
	・障害物レース (ペア) (B)
	・短距離走 (B・D)

めることができた」、「教員同士と話題が共有出来た」など、教師の資質の向上につながる内容が多く挙げられた。問題点について、子童・生徒に関しては、「合同で行う内容で生徒同士での意思の疎通を図るのが難しい」や「誤解によってストレスを感じた」など障害の違いから生ずる問題点が示された。また、「学部や部門ごとに時程が違うので、合同練習の時間が取れない問題」も挙げられた。教師に関しては「連絡不足」や「伝統を壊さないでできるか心配」などが挙げられた。

問題点の改善の工夫に関しては、「運動会 (体育祭) の後もお互いに関わりを持たせ相互の障害特性など理解を促進するように工夫した」や「昼食時間や昼休みの時間をずらして合同練習の時間帯を確保するように工夫をした」という意見もあった。

4 文化祭 (学習発表会)

文化祭 (学習発表会) での、打ち合わせ会議、出し物の準備、生徒会活動それぞれについて、合同で行っている学校と、部門別に行っている学校に分かれた。

文化祭 (学習発表会) におけるメリットについて、子童・生徒に関しては、「日頃の学校生活では

交流はないが、文化祭（学習発表会）を通して、相互理解を深めるきっかけになった」や「お互いの学習発表を見るのを楽しみにしている」などが挙げられた。教師に関しては、「文化祭（学習発表会）を通して、障害の異なる児童生徒を同じ活動に取り組ませるためにはどうしたらよいか考える良い機会となった」や「学校行事を通して、お互いの障害を知る機会となった」と挙げられた。問題点について、児童・生徒に関しては「コミュニケーションの手段が異なる」や「お互いの疎通がうまくいかず、伝え合うのをあきらめてしまう」など、障害の違いから生ずる問題点が示された。教師に関しては、「情報の揭示」や「合同で全体練習を行うときの日程や時間の調整が困難なこと」が挙げられた。

問題点の改善の工夫に関しては、「手話通訳」や「文字情報の揭示を行ったり、話し合いの場面で意思疎通がうまくいくよう、お互いに手話を使っている」など、コミュニケーション手段による課題の解決を図っているという意見も見られた

V まとめ

聴覚障害部門と知的障害部門が合同で行う学校行事（運動会と文化祭）においての最大のメリットは、聴覚障害部門と知的障害部門の教育課程や時程が違うので普段からの交流はないが、学校行事を通して交流を深め、協力して活動に取り組むことができたことである。そして、最大の問題点は、聴覚障害部門の児童・生徒と知的障害部門の児童・生徒のコミュニケーションの手段が違うことから、合同で行われている学校行事の活動の話し合いで誤解を招いたり、意思疎通がうまくいかないことが挙げられた。それぞれの問題点を解決するために、日ごろから知的障害児童・生徒に簡単な手話を学んだり、活動の話し合いの場で、教師が間に入り手話通訳または音声通訳をすることでコミュニケーション問題の解決を図ろうとしていることが分かった。コミュニケーションなどで課題があるものの、概ね大きな問題もなく実施されており、相互理解の面などでのメリットが示された。

VI 今後の課題

今後の課題として、教師の観点だけでなく児童・生徒または保護者からの観点で調査を行うことにより聴覚障害部門と知的障害部門を併置する特別支援学校の学校行事の指導や配慮について考えることができると思われる。

文献

文部科学省(2011)特別支援教育資料, 第2部データ編.

財団法人全日本ろうあ連盟(2010)第五回障がい者制度改革推進会議,意見提出.